

校内別室を活用し、一部の授業での通常教室に参加

不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校 1 年生の 10 月から校内別室を活用してきた。当初から、毎月 12 日程度は、登校することができた。中学 2 年生でも継続して別室登校をしている。学習支援員と学習に励む中で徐々に学習の自信が芽生え、自ら「クラスの授業に参加したい。」と申し出があり、1 学期後半から参加している。

具体的な取組

○学習支援

学習に関して、自分の得意や興味・関心が高い教科に関して道具の持参を促し、丸付けや学習支援を行った。継続的に行うことで、当該生徒はその教科に対して自信をもてるようになり、授業への参加意欲につなげることができた。

○考查試験の別室対応

授業によっては、クラスに入ることはできたが、中間・期末考查では入るのが難しく、別室で実施できるようにした。実施可能な教科にしぼって試験を受けられるようにした。

○担任との連携

担任が当該生徒の得意、興味・関心のある教科担当だったこともあり、空いている時間帯に校内別室で個別の指導を行った。また、授業の進捗だけでなくクラスの様子や学年の予定などの共有を図り、当該生徒とのコミュニケーションの促進につながった。

○仲間づくり

別室内には他学年の生徒も利用しており、そこでの交流を行うことで、コミュニケーションを図ることにした。得意なことをお互いに教え合ったり、自己有用感を育めるようを意識的に関わりを増やすようにしている。



成果

教室に入れなかった当該生徒が、一部の授業には参加できるようになった。教科に対する苦手意識もなくなり、自信をもって授業や試験に臨めるようになってきた。他の生徒に対して教える姿なども見られ、周りの生徒も当該生徒のがんばりのよい影響を受けるようになった。

課題

意欲が低い教科に対してのアプローチをどのように進めるかが課題。新しいことに前向きに取り組める環境を継続的に整備することが必要である。

校内別室での学習習慣の確立・自己肯定感の醸成について

不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校 2 年生に進級した直後、新しい友人と言葉の行き違いや誤解によって関係がこじれてしまい、突然登校できなくなった。

教室での人間関係に不安を感じているため、校内別室を「居場所」として利用することになった。

具体的な取組

○校内支援委員会

管理職、生活指導主任、特別支援教育コーディネーター、不登校担当教員、学年主任、養護教諭、SC、不登校巡回指導教員、校内別室指導員をメンバーとした会議では、生徒情報を共有し、具体的な方向性や支援を協議した上で、支援を進めている。

○校内別室での学習支援

学習する教科や内容は生徒自身が決め、質問に対しては支援員が個別に対応した。支援員は、生徒が興味をもつことができるような教材を準備した。授業を受けられない不安があったが個別に学習を進めることで理解が進み、自ら取り組む教科を増やしていくなど、学習に意欲的になっている。

○自己肯定感を高める関わり

人間関係の構築に自信を失っているため、自己肯定感を高め自信を取り戻す必要があると考えた。校内別室では毎日取り組んだ内容や自分の気持ちを自由に記入できるシートを用いて一日の振り返りを行った。支援員らはそれに自己肯定感が高まるようなポジティブなコメントを返していった。

【担任・学級とのつながり】

校内別室支援員と連携を図りながら、学級の様子を伝えたり、行事前に参加や参観の声かけを行ったりした。



成果

校内別室利用後、週 2 日の登校から始めたが、すぐにほぼ毎日登校するようになった。別室では、支援員のサポートの下、学習に積極的に取り組み、将来の夢を語るなど明るい様子で過ごしている。別室を利用している他の生徒とも仲良く過ごしている。

課題

当該生徒の気持ちに寄り添い、教室復帰を検討していく。また、SCとの面談を設定する。

校内別室指導の活用について

不登校生徒の状況

対象生徒は、中学校 2 年生である。1 年生までは学校に通うことができていたが、2 年生の 2 学期から教室に入れないことが多くなり、早退する日も増えていった。教室に入れない時間は、校内別室を活用することで、ほとんど欠席することなく、学校に登校することができている。

具体的な取組

○学校での居場所づくり

本校では、様々な理由により教室に入りづらい生徒に対して、校内別室を設置している。令和 5 年度から校内別室指導支援員を配置し、利用する生徒に対して積極的にコミュニケーションを図り、登校しやすい環境づくりを行っている。

○支援員と担任、管理職との情報共有

水曜日を除き、校内別室には支援員がいるが、下校後に一日の様子をファイルにまとめ、学級担任と共有を図っている。

管理職も定期的に校内別室を訪れ、生徒の様子を伺うとともに、各学年との連携も図っている。

○個別対応が可能な校内別室

校内別室では、3 つの部屋に区切り、個別対応が可能である。オンライン授業を受けたり、支援員とボードゲームに取り組んだり、それぞれが安心して過ごすことができる環境にしている。



○コミュニケーションの充実

担任や学年の教員も授業の空き時間等を活用して配布物を渡したり、コミュニケーションを取ったりするなど、積極的に校内別室を訪れている。また、必要に応じて S C や特別支援専門員も校内別室を訪れるなど、組織的に対応している。

成果

校内別室を活用することで、不登校傾向にある生徒も毎日学校に登校することができるようになった。また、担任も生徒とコミュニケーションを取る時間が増え、生徒理解や進路指導も円滑に進めることができるようになった。

課題

校内別室には登校できているが、教室復帰ができていない生徒への対応を検討する必要がある。

生徒の居場所づくり～アニメをきっかけに～

不登校生徒の状況

対象生徒は、小学校3年生から欠席が多くなり、その後はあまり学校に行けなかった。中学校では入学式当日と翌日は登校したが、それ以降欠席が続いた。校内別室に登校するようになってからは、週4日の別室開室日には登校している。

具体的な取組

○アニメ関連の作品制作

教科学習を拒否していたので好きなアニメでローマ字を覚えよう、とローマ字表を制作した。

その後もアニメでシャドーボックス制作をするなど、作品制作を続けている。



○特別支援学級との交流

ローマ字表を見た教員からの提案で特別支援学級のアニメに関連した交流授業に時折参加するようになった。何度か参加し、そのクラスの生徒や教員との関わりが増え、緊張せずに話せるようになった。

○学習の継続

教科のプリントをやり終えた時、アニメの花丸を書いたり、プリントの端に印刷したポケモンを切り取って貼ったりできるようにした。それが楽しみで学習をするようになった。また、何気なく書き始めた九州の地図から広げて日本地図や都道府県の学習もした。

○アニメから始まる会話や交流と自信

初対面でも生徒同士でアニメの話をしたり、教員に丁寧にアニメの事を教えたりと、アニメの話をきっかけに生徒や教員など人との交流が広がった。そこで周囲から認めってもらうことで、自信をもち、制作活動をしたり、人と会話したりするようになった。

成果

アニメが好きで詳しいと周囲から認められたことで自分に自信をもち、その話題をきっかけに教員や生徒と交流し活動するようになった。別室利用アンケートでは「他の生徒との交流が増えた」「表情などが元気になった」にチェックを入れた。

課題

同級生に会うことを嫌がり、自分のクラスに行くことは難しい。クラス復帰の予定がなく学習意欲も低い。